

2016年3月20日川越教会

真理の王

加藤 享

【聖書】ヨハネによる福音書 19章 16節b～30節

こうして、彼らはイエスを引き取った。イエスは、自ら十字架を背負い、いわゆる「されこうべの場所」、すなわちヘブライ語でゴルゴタという所へ向かわれた。そこで、彼らはイエスを十字架につけた。また、イエスと一緒にほかの二人をも、イエスを真ん中にして両側に、十字架につけた。ピラトは罪状書きを書いて、十字架の上に掛けた。それには、「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」と書いてあった。イエスが十字架につけられた場所は都に近かったので、多くのユダヤ人がその罪状書きを読んだ。それは、ヘブライ語、ラテン語、ギリシア語で書かれていた。ユダヤ人の祭司長たちがピラトに、「『ユダヤ人の王』と書かず、『この男は「ユダヤ人の王」と自称した』と書いてください」と言った。しかし、ピラトは、「わたしが書いたものは、書いたままにしておけ」と答えた。兵士たちは、イエスを十字架につけてから、その服を取り、四つに分け、各自に一つずつ渡るようにした。下着も取って見たが、それには縫い目がなく、上から下まで一枚織りであった。そこで、「これは裂かないで、だれのものになるか、くじ引きで決めよう」と話し合った。それは、／「彼らはわたしの服を分け合い、／わたしの衣服のことでくじを引いた」という聖書の言葉が実現するためであった。兵士たちはこのとおりにしたのである。イエスの十字架のそばには、その母と母の姉妹、クロパの妻マリアとマグダラのマリアとが立っていた。イエスは、母とそのそばにいる愛する弟子とを見て、母に、「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です」と言われた。それから弟子に言われた。「見なさい。あなたの母です。」そのときから、この弟子はイエスの母を自分の家に引き取った。

この後、イエスは、すべてのことが今や成し遂げられたのを知り、「渴く」と言われた。こうして、聖書の言葉が実現した。そこには、酸いぶどう酒を満たした器が置いてあった。人々は、このぶどう酒をいっぱい含ませた海綿をヒソブに付け、イエスの口もとに差し出した。イエスは、このぶどう酒を受けると、「成し遂げられた」と言い、頭を垂れて息を引き取られた。

【序】世界三聖人の死

世界の三聖人とは、**釈迦**、**孔子**、**キリスト**をさします。**釈迦**は北インドの王族の子として紀元前5世紀半ばに誕生しました。29才で出家し、35才で悟りを開いて仏陀（法を悟った覚者）となりました。**80才**に達した彼は、沙羅双樹の木の下に設けられた床に横たわり、高弟・従者の見守るなかで「悲しまなくてもよい。私が説いた**教え**と**戒律**が、死後のお前たちの師となるだろう。一切は過ぎ

ていく。怠ることなく**修業に励みなさい**」と語りつつ、**静かに入寂**されました。

孔子は釈迦の誕生より 11 年後に、中国山東省の小さな村で生まれました。3 才で父と死別し極貧の中で成長しました。30 才で政治家として立つ志を抱き、**40 才半ば**に魯の国で**官位**につき、**礼の教え**をもって理想の国家を作り上げようとしたが、56 才で失脚。**68 才**より**学問**で後進の指導に当たる使命に立ち、3000 人を超える弟子に教えました。**74 才**に達し、渭水という河を見たいといい「すべてのものはこのように**流れていく**。夜もなく、昼もなく」と言って、弟子に看取られ、**運命という大河**に身を委ねて、**静かに**息を引き取りました。

キリストは紀元前 6 年頃、ローマ帝国の片隅ユダヤのベツレヘムの宿屋の家畜小屋で誕生しました。**30 才頃**に神の召しを受けて宣教活動を開始しましたが、**3 年程**でユダヤ教の指導者たちから危険人物視されて訴えられ、ローマ総督から極悪の犯罪者が受ける**十字架刑**に処せられてしまいました。

キリストは朝 9 時、十字架に手足を太い釘で磔られ、6 時間も**死の苦し**みを味わい、「**わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか**」と叫び、午後 3 時頃に息を引き取り、墓に葬られました。しかし 3 日目の朝、墓より復活し、40 日間弟子たちの信仰を確立してから、**昇天**されました。

80 才、74 才の老年まで生きて、弟子たちに見守られながら**静かに人生を閉じた**釈迦、孔子と比べて、わずか 3 年間の伝道生活を送っただけで、十字架刑に処せられて 30 代半ばにも達せずに生涯を閉じた**キリストの人生**は、また何と**激しく、劇的**なものだったことでしょう。それだけに**キリストの働きは、十字架の死**に集約されていたと申せましょう。

キリストは、ユダヤ教最大の**過越祭**の金曜日に十字架で死に、墓に葬られ、三日目の日曜日の朝に、墓より**復活**されました。暦によると、ユダヤでは今週が過越祭です。今週の金曜が**受難日**で、来週の日曜が**復活節**イースターです。今週の水曜・木曜の祈祷会に皆さん、お集り下さり、聖書を学び、祈りを合わせて、復活節の礼拝を守る備えを致しませんか。

〔1〕総督ピラトの判決

主イエスは木曜日の夕食を弟子たちと共にすると、**ゲッセマネの園**に出かけて行って、汗を滴らせて懸命に祈られました。そこへ主を裏切った**ユダ**の案内でローマ兵の一隊と祭司長の下役人たちがやってきて主を逮捕し、大祭司の許に連れていきました。最高法院が召集されましたが、簡単な取り調べだけで、すぐに**ローマ総督ピラト**の許に連行されました。何故なら**最高法院**は、死んで

葬られた**ラザロ**を墓から甦らせた主イエスの奇跡に驚き、「このままにしておけば、皆が彼を信じるようになる」と恐れて、既にナザレのイエスを**死刑にする判決**を下していたからです（11：51）。

しかしピラトには、ユダヤ教の大祭司たちが、イエスの死刑を要求する理由がよく分かりません。そこで「お前は**ユダヤ人の王**なのか。いったい**何をしたのか**」との尋問から、取り調べを始めました（以下、口語訳聖書の方がはっきりしているので、それを引用します）。「**わたしの国は、この世のものではない**」「**それでは、あなたは王なのだな**」「**あなたの言うとおりに、わたしは王である**。わたしは**真理**についてあかしをするために生まれ、またそのためにこの世にきたのである。だれでも真理につく者は、わたしの声に耳を傾ける」。ピラトは戸惑ってつぶやきました。「**真理とは何か**」

宗教とか真理とは全く無縁に生きてきたピラトです。「わたしにはこの人に、なんの罪をも見出せない」というほかありません。すると祭司長たちは反論しました。「わたしたちには**律法**があります。その律法によれば、彼は自分を**神の子**としたのだから、死罪に当たる者です」。しかし行政官である総督としては、宗教上の問題に関する判決は下せません。

すると祭司長たちは言いました。「自分を王とする者はすべて、**カイザルに背く者**です」そうです。自分が神の子だ、メシアだと主張しても、それはユダヤ教徒の問題です。しかし真理の国であろうと何であろうと「**王だ**」と名乗れば、**国王カイザルの支配に背く者**ではないかという祭司長の主張を無視できません。

その上、祭司長たちに煽動されて「**殺せ、殺せ、十字架につけよ**」と叫ぶ群衆の騒ぎが激しくなっていきます。そこで「この男に罪を見出せない」と繰り返し語っていたピラトも、**騒乱を惹き起こす危険人物**という理由で十字架刑の判決を下して、我が身の保全を計ってしまいました。そして主の十字架には、ヘブライ語、ラテン語、ギリシア語で書かれて誰にでも読める「**ナザレのイエス、ユダヤ人の王**」という罪状書きを掲げたのでした。

〔2〕ユダヤの民をエジプトから救い出した小羊の血

しかし主イエス自身は、自分をユダヤ人の王だとは名乗っておられません。「お前はユダヤ人の王なのか」というピラトの質問に「あなたの言う通り、**わたしは王である**。しかし**わたしの国は、この世のものではない**。わたしは**真理**についてあかしをするために生まれ、またそのためにこの世にきたのである。

だれでも真理につく者は、わたしの声に耳を傾ける」と答えて居られます。(18 : 37) すなわち、**神の救いの真理**を明らかにし、**その救いをこの世にもたらず王**なのだとおっしゃったのです。

先日も申し上げましたが、主イエスは弟子たちが「**あなたはメシア、生ける神の子です**」(マタイ 16 : 16) と告白できるようになると、ご自分が必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの**苦しみを受けて殺され**、三日目に**復活する**ことになっているとの**予告**を、繰り返し語るようになりました。初めて聞かされた時には、ペテロが「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません」と主をいさめて、「サタン引き下され。あなたは**わたしの邪魔をする者**」と厳しく叱られています。(マタイ 16 : 23)

そうです。いと高き神が、身を低くして人となり、しかも極悪人が刑罰として受ける**十字架の死**を引き受けるなどということは、**人の心に思い浮かびもしない**ことです。使徒たちも皆、最後まで理解出来ず、逃げ散ってしまいました。

旧約聖書の時代に、大飢饉を避けてエジプトに移住したイスラエルの民は、王朝が代わると、**奴隷扱い**を受けるようになり、苦しみました。故国のカナンに戻る許可を得ようと国王に願い出ましたが、許可が出ません。すると神は、木曜日に傷のない**小羊**を屠って、**その血**を家の入り口の柱に塗るように命じました。そしてその夜に、エジプト中の家の初子が皆死ぬという**神の裁き**を下しましたが、小羊の血が塗られているユダヤ人の家は、**神の裁きが過越して**守られたのです。国王はあわててユダヤ人の国外退去を命じ、民はエジプトを脱出できたのでした。以来**過越祭**が民族にとって**一番大事な祭り**となりました。

主イエスは、過越祭の**木曜日の夜**に逮捕され、**金曜日の朝**に十字架につけられました。まさに汚れのない命と引換に、血をもって**イスラエルの民を救い出した小羊**として、主イエスは十字架に付いて、死んで下さったのです。

また主は息を引き取られる前に、十字架を見上げる母**マリア**に、「**婦人よ、御覧なさい。あなたの子です**」と言われ、そばに付き添う弟子**ヨハネ**には、「**見なさい。あなたの母です。**」と声をかけられました。新しい親子の絆に、老いていく母を委ねる**愛の配慮**—家族の再創造、罪によって引き裂かれていく人と人との交わりに、十字架による**新しい愛の救い**を現されたのでした。

【結】成し遂げられた

ヨハネ福音書は 19 章の十字架の記事の中で、「**聖書の言葉が実現するためであった**」という言葉が三度も記されています（24、28、36 節）。旧約聖書に記されてきたユダヤ人の信仰の言葉が、この通りに行われていったということでしょう。そして、「**渴く**」と言われて貧しい兵士が飲む酸いぶどう酒を飲み、「**成し遂げられた**」と言われて、息を引き取られました。そうです。主の十字架の救いの御業を、主はこのようにして「**成し遂げた**」のです。

主はピラトに「わたしは**真理**について**あかしをする**ために生まれ、またそのために**この世にきた**のである。」と言われましたが、主の生涯はまさに神の救いの恵み、**神の救いの真理**を、十字架の死をもって明らかにし、実現・成就されたと申せましょう。まさに**真理の王国の王**イエスは、**十字架に死ぬこと**で**真理の王としての王権を確立**されたのです。

神は三日目に主を墓の中より**復活**させて、弟子たちのもとに、再び送られました。主はユダヤ教徒を恐れて家に閉じこもっていた弟子たちの**信仰を復活させ**、世界の全ての人々に、十字架の福音を宣べ伝える証し人へと**立ち直らせて**くださいました。**十字架の死**による救いの恵みと死よりの**復活**による恵み——これが**キリスト教信仰の核心**です。

祈ります：主なる神さま。主が味合われた、6 時間に及ぶ十字架の死の苦しきは、如何ばかりだったことでしょう。想像のつかない痛みだったことでしょう。そのように苦しまれた十字架によって、わたしたち一人ひとりの罪を贖ってくださったあなたの恵みを、心に刻み付けて生きる者にしてください。十字架と復活の恵みを深く覚えて、この一週間を過す者にしてください。救い主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン